

平成30年度 あまっ子ステップ・アップ調査の結果について

1 調査目的

学校は、児童生徒の学力と学習状況を把握することで、一人一人に応じた指導の充実や学習状況の改善を図る。また、教育委員会は、教育施策の成果と課題について検証し、その改善を図ることで、教育活動に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容ごとの人数（人）

学年	学力調査					生活実態調査
	国語	算数・数学	英語	社会	理科	
小学1年生	3,362	3,366				3,371
小学2年生	3,397	3,401				3,406
小学3年生	3,371	3,375				3,384
小学4年生	3,497	3,499				3,511
小学5年生	3,504	3,507				3,520
小学6年生	3,342	3,344				3,352
中学1年生	2,855	2,854	2,851	2,851	2,850	2,850
中学2年生	2,916	2,914	2,910	2,918	2,918	2,920

3 実施日

小学校 平成30年12月10日（月）～12日（水）のうちの1日
 中学校 平成31年 1月10日（木）

4 学力調査の概況

学習指導要領に示されている目標や内容に照らしたテスト形式の全国共通の問題で、基礎的・基本的な内容（約70%）、発展的な内容（約30%）の定着度を調査した。

【表の見方】

総受検者を母集団とした学力層（四層）の人数割合

・・・全国の総受検者（人数非公表）を得点順に25%ずつA～D層に分け、本市において、どの層にどれだけの人数がいるかを表した割合（%）

達成率・・・・・・・「目標値」を上回った児童生徒の人数割合（%）

目標値・・・・・・・各教科において「おおむね満足」といえる正答率（%）。その水準まで定着できていれば、次の学習内容に進むことができる目安として、設定されている。

(1) 小学校

学年	教科	総受検者を母集団とした 学力層(四層)の人数割合(%)				計 (%)	達成率(%) 目標値を達成した 人数割合
		A層	B層	C層	D層		
小1	国語	19.9	22.5	26.8	30.8	100	70.3
	算数	18.7	15.7	27.8	37.7	100	57.6
小2	国語	18.5	22.3	26.9	32.2	100	67.6
	算数	17.1	22.3	27.8	32.8	100	64.8
小3	国語	19.5	22.9	28.3	29.4	100	58.8
	算数	21.3	23.6	26	29.1	100	60.3
小4	国語	16.8	19.8	28.7	34.7	100	46.9
	算数	17.2	22.7	28.5	31.6	100	45.8
小5	国語	19.7	23.1	27.1	30	100	48.7
	算数	22.2	22.1	26.3	29.3	100	53.9
小6	国語	23.2	23.2	25.2	28.4	100	59.4
	算数	21.6	21	24.9	32.6	100	53.8

(2) 中学校

学年	教科	総受検者を母集団とした 学力層(四層)の人数割合(%)				計 (%)	達成率(%) 目標値を達成した 人数割合
		A層	B層	C層	D層		
中1	国語	24.2	23.2	25.8	26.9	100	54.2
	数学	27	23	24.8	25.1	100	67.1
	英語	25.4	22.8	23.2	28.6	100	54.7
	社会	24.7	24.6	24.3	26.4	100	63.8
	理科	24.2	24.4	23.8	27.6	100	61
中2	国語	25.5	26.6	25.4	22.5	100	79.9
	数学	29	27	22.8	21.2	100	76.8
	英語	27.1	26.8	23.8	22.4	100	67.3
	社会	23.9	24	25.3	26.9	100	72.8
	理科	25.3	25.6	23.8	25.3	100	67

【まとめ】

学力調査では、小中学校のほとんどの学年・教科で、半数以上の児童生徒が目標値を超えている。しかしながら、小学4年生では、半数以上の児童が、国語・算数ともに目標値に達していない。また、小学校の全学年においてD層の児童の割合が高い。今後、一人一人に応じたきめ細かな指導とともに、基礎学力の向上に向けた取組が必要である。

5 生活実態調査の概況

「学びの基礎力」「社会的実践力」「学級力」「家庭学習力」の4つの視点で、アンケート形式（主に4択）により調査した。

以下は、質問の中で、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と肯定的に回答した割合（以下、肯定群回答割合）の高かった質問と、肯定群回答割合の低かった質問である。尚、学年によって質問数や問い方は異なっている。（表の○は肯定群割合の高かった質問項目を示し、●は肯定群割合の低かった質問項目を示している）

（1）学びの基礎力（豊かな基礎体験、学びに向かう力、自ら学ぶ力など）

質問項目	尼崎市における各学年の肯定群別回答割合							
	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2
○家の人は自分のことを気にかけてくれていると思う	87.2	89.6	91.4	89.9	90.4	90.4	90.5	90.8
○ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある	89.1	86.3	88.0	87.0	90.2	91.3	88.8	89.6
●新しく習ったところは、何度もくりかえして練習している	79.0	68.4	56.5	48.2	45.8	46.5	32.6	29.3
●授業で学んだことを自分なりにノートにまとめ直している	／	／	46.5	44.7	46.2	46.7	35.6	28.7

（2）社会的実践力（問題解決力、自己成長力、豊かな心など）

質問項目	尼崎市における各学年の肯定群別回答割合							
	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2
○自分の力をできるだけ伸ばしたいと思う	93.0	93.1	92.9	90.3	90.6	93.0	90.7	92.5
○自分がやらなければならないことは、責任を持ってやりぬくことができる	／	／	78.5	74.2	77.4	80.1	73.9	76.2
●社会で問題になっていることについて、どうすればよいか、考えたことがある	／	／	61.2	53.7	55.9	54.6	44.9	42.7
●自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えることができる	／	／	59.2	53.1	52.3	53.4	38.8	37.4

（3）学級力（対話力、支え合う力など）

質問項目	尼崎市における各学年の肯定群別回答割合							
	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2
○係や当番の活動に責任を持って取り組む学級です	92.6	89.8	86.8	85.2	83.9	86.5	79.1	79.4
○『ありがとう』を伝え合っている学級です	／	／	87.0	82.5	78.0	83.2	70.8	71.9
●授業中にむだなおしゃべりをしない学級です	75.0	59.0	40.7	46.3	30.9	33.3	17.9	24.1

（4）家庭学習力（家庭学習の環境や習慣について）

質問項目	尼崎市における各学年の肯定群別回答割合							
	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2
○学校の先生が出した宿題をきちんとやりとげている	93.6	93.0	87.6	87.7	85.9	86.8	77.6	78.7
○家で学習していて、わからないときは教えてくれる人がいる	83.8	89.5	92.0	87.0	84.6	81.5	73.9	63.7
●授業で習ったことは、その日のうちに復習している	／	／	50.8	40.3	36.3	32.5	20.7	16.5

【まとめ】

生活実態調査では、宿題をはじめ与えられた課題をやりぬくことへの意識や、保護者が自分のことを見てくれているという意識が高い傾向にある一方、学校や家庭において、学習内容が定着するまで反復することや、「考え、まとめ、伝える」といった学習過程の徹底に課題が見られる。

今後、学校は、自校の結果を分析し指導方法の工夫改善を図るとともに、市として、全校で展開する「授業の質的改善」「基礎学力の向上」の取組を進めていく必要がある。

また、「(3)学級力」において、授業規律に関する質問項目で課題が見られたことから、学力向上の基盤として、全ての児童生徒が安心して学べる学級づくりを進めていくことが重要である。

6 考察

学力調査と生活実態調査の結果から、特徴的な傾向は以下の通りである。

- (1) **【D層の割合】** 小学校低学年におけるD層の割合が高い（特に小1算数）。一方、小学5年生から中学生にかけては減少している傾向がみられる。 《「4 学力調査の概況」参照》
小学校高学年や中学校では、学力向上の取組が定着し、小学校低学年に比べて、D層が減少している可能性が考えられる。そこで、学習習慣が身につけにくい児童や授業中に集中しづらい児童に対する授業補助支援を行うなど、小学校低学年への働きかけが必要である。
- (2) **【達成率】** 小学4年生（現5年生）の達成率が特に低い傾向がみられる。《「4 学力調査の概況」参照》
小学校中学年では、抽象的な事象の学習や語彙量が増加することから、学習への苦手意識が高まる時期である。そこで、適切な学習課題の設定や教材づくりを意識させ、思考力を高める授業実践が必要である。
- (3) **【学年間のばらつき】** 学年間のばらつきが小さい学校があることを確認できる。 《別表1参照》
学力が高く、学年間のばらつきが小さい学校では、「〇〇スタイル」「〇〇プラン」等、全教員が共通理解のもと取組を進めており、学力の低い児童に対する下支えとなっている可能性がある。今後、帯学習や放課後学習等においても全教員が共通理解のもとで取り組むことが有効であると考えられる。
- (4) **【意味付けや論理的な思考】** 「授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている」「筋道を立てて、ものごとを考えることができる」など、考え方の理解や筋道を大切にすることは、高学年になるほど学力に正の影響を与える傾向がある。 《別表2-①②参照》
授業では、教員が一方的に教え込むという指導だけでなく、思考する学習活動を重視し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が必要である。授業改善・学力保証推進チームが学校訪問した際には、そのような学習がなされているか状況を把握し、指導助言をしていく必要がある。

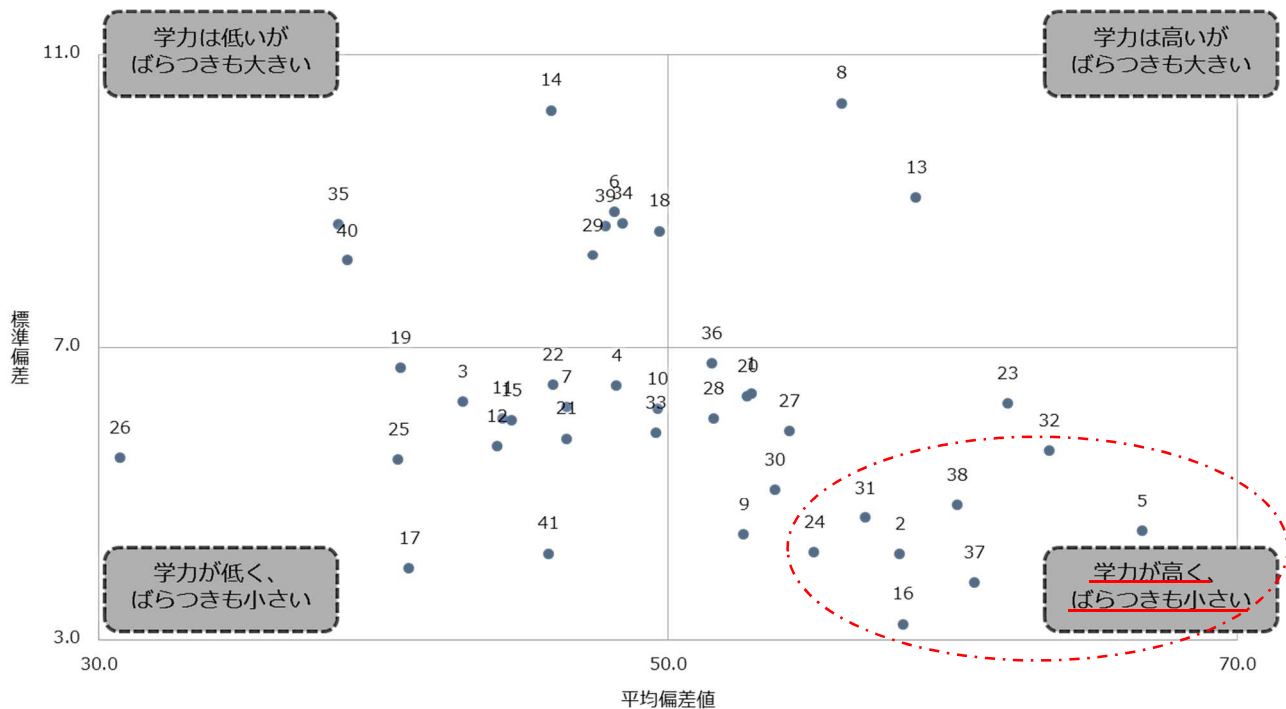
【まとめ】

上記のように、児童生徒の発達段階ごとの課題を把握して対応すること、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図ること、また全教員が共通理解のもとで取組を進めることなどが有効であることが確認できた。

一方で、本調査の目的は、一人一人に応じた指導の充実や学習状況の改善を図ることにあり、全国学力・学習状況調査のような悉皆調査ではないため全国比較は難しい。今後、各校の結果を単年で分析するだけでなく、個人の経年による変化を把握し指導に役立てていくことが重要である。

別表

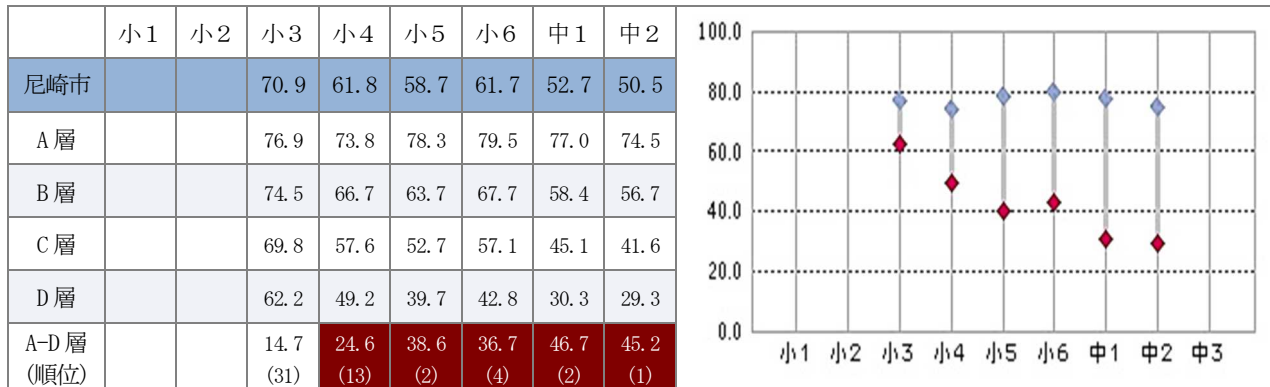
【別表1】小学校における学年間のばらつき（概要）



【別表2】学力調査（4層）と生活実態調査のクロス分析

※下表の数値は、本市において、学力層（A～D層）ごとに、各質問に対し肯定的に回答した割合（%）を示しています。
 ※「A-D層」の数値は、A層からD層の割合を引いた値です。順位は、学年A-D層の差の大きい順を示しており、全ての質問中で、10位以内のものに濃い色の網掛けをしています。

① 授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている



② 筋道を立てて、ものごとを考えることができる

